



## フッサールの必然的基礎づけ

著者	堀 栄造
雑誌名	筑波哲学
号	21
ページ	1-13
発行年	2013-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00121537">http://hdl.handle.net/2241/00121537</a>

# フッサールの必当然的基礎づけ

堀 栄造

1919 年夏学期講義「自然と精神」を「自己の学問論的転回点」とするフッサールは、1922 年のロンドン講演および 1922/23 年の哲学入門講義において突如として「学問論的必当然的基礎づけ」を主題化するが、1923/24 年の第一哲学講義において学問論的路線を変更するかのように見える。本論は、そうしたフッサールの学問論的展開について、これから究明することにする。

## (1) 1922 年のロンドン講演と 1922/23 年の哲学入門講義

フッサールは、「自己の学問論的転回点」としての 1919 年夏学期講義「自然と精神」の学問論において、可能的諸学問をアポステリオリな経験的諸科学とアプリオリな形相学としての領域的存在論に区分し、前者の骨格を成す後者を現象学によって超越論的に基礎づけることによって、厳密な学問体系の創立を企図した<sup>(1)</sup>。それでは、その直後の学問論は、どのような方向へ展開していったのだろうか。その問題に直結するものが、フッサールの 1922 年のロンドン講演とそれを拡張的に仕上げようとした 1922/23 年の哲学入門講義である。

フッサール全集第 35 巻「哲学入門 1922/23 年講義」の編者ベルンツ・ゴーセンスによれば、フライブルク時代 (1916～1938) のフッサールは、哲学入門講義を 1916 年夏学期、1918 年夏学期、1919/20 年冬学期、1922/23 年冬学期と四度行った。そして、1916 年の講義と 1918 年の講義はその後の講義よりも一層強く哲学史に定位して導入される哲学的根本問題の呈示および究明によって規定され、1919/20 年の講義は哲学的根本問題および個別的問題のより一層広範な叙述および議論を獲得するとともに体系的観点でも強まるが、1919/20 年の講義と 1922/23 年の講義との間の展開史的裂け目は非常に大きいとされる<sup>(2)</sup>。

それでは、1919/20 年の講義と 1922/23 年の講義との間の展開史的裂け目とは、一体何か。ゴーセンスによれば、1919/20 年の講義は、根本的傾向においてその特有の目的

論一色にもかかわらずまだ明らかに「従来の意味での入門」として形作られており、つまり、まさに初学者に対して哲学的研究の全領域を手ほどきして呈示しようとするような伝統から出発する基礎的な哲学的諸問題への案内として形作られている。それに対して、1922/23 年の講義では、そうした関心は背景へ強く押しやられ、「哲学的研究への案内と同時に哲学的体系全体への入門という二重の意味での入門の形態」がとられている<sup>③</sup>。つまり、1922/23 年の哲学入門講義において芽生えた新たな構想は、哲学的研究への案内に止まらず「哲学的体系全体への入門」をめざすということである。したがって、1919 年夏学期講義「自然と精神」において企図された「厳密な学問体系の創立」は、1922/23 年の哲学入門講義において「哲学的体系全体の入門的叙述」という方向へ展開していくことになるのである。

ゴーセンスによれば、「哲学的体系全体の入門的叙述」という新たな構想を初めて試みる外的なきっかけとなったのは、ジョージ・ドゥズ・ヒックスによる 1922 年 6 月のロンドン大学での四回の講演という名目でのフッサールへの招待であった。そして、その招待は、イギリスで超越論的現象学を紹介し周知させるという目標をもっていた。しかし、ロンドン講演が展開されるべき哲学的体系全体を核心においてあらかじめ描き出そうとするかぎりでは、とりわけ第三ロンドン講演および第四ロンドン講演は、フッサールが 1921 年および 1922 年にとりわけ展開していた始まりの問題および入門の問題をはるかに越え出ていく。だから、ロンドン講演は、むしろその全体性において新たな構想全体の行動計画書として妥当するのであり、あるいはフッサールの言葉を以てすれば、「今の立場（例えば、私は、アプリアリな諸学問の全体系を超越論的現象学のうちへ受け入れる。）から見て、エゴ・コギトについての現象学的哲学の全体系を本来的に」<sup>④</sup>述べる。つまり、ロンドン講演は、哲学の始まりの考察を「普遍的で絶対的に正当化された学としての哲学」というプラトンに帰属させられる「哲学の理念」に定位し、「哲学的知識の普遍性という量的契機とその究極的妥当性という質的契機」による「哲学の二面的規定」を企図するのである<sup>⑤</sup>。したがって、1922 年のロンドン講演とそれを拡張的に仕上げようとした 1922/23 年の哲学入門講義の新たな構想に基づく学問論は、「哲学的体系の普遍性」という量的契機と「哲学的体系の絶対的正当化」という質的契機を軸にして展開するものと言える。

そこで、本論は、次節において、1922 年のロンドン講演について吟味検討しなければならない。

## (2) 1922 年のロンドン講演の「必然性」という指標

ゴーセンズによれば、1922 年のロンドン講演は、「哲学的体系の普遍性」と「哲学的体系の絶対的正当化」という両契機の体系的要求をほぼ同程度に考慮するような或る構造を認識させる。すなわち、第一ロンドン講演は、始まりの問題およびそれと結び付けられた現象学的還元の紹介に捧げられているけれども、第二ロンドン講演は、現象学的本質論の理念およびそれへ至る道を主題化している。第一ロンドン講演と第二ロンドン講演は、「絶対的正当化」という主題に属する。第三ロンドン講演は、「理性能作としての認識」の主題化において、「新たな哲学的 - 現象学的学問論の普遍性」という主題設定への移行をもたらし、第四ロンドン講演の「一切の存在論の体系」についての諸考察という主題設定への移行をもたらす<sup>6)</sup>。

要するに、第一ロンドン講演「エゴ・コギトへ至る道と現象学的還元の方法」および第二ロンドン講演「現象学的経験の領野と現象学的学問の可能性 超越論的主観性の本質学としての超越論的現象学」においては、「哲学的体系の絶対的正当化」が主題化され、第三ロンドン講演「超越論的現象学と可能的認識、可能的学問、可能的対象性および世界の問題」および第四ロンドン講演「学問論としての論理学の具体的理念 将来の現象学的哲学の具体的目標」においては、「哲学的体系の普遍性」が主題化されるということである。

ところで、1922 年のロンドン講演の序文「現象学的哲学の一般的目標」において、フッサールは、次のように述べている。「一切の真正な諸学問がその原理的な概念や命題およびその究極的正当化の一切の効力をそこから引き出さなければならないような諸認識源泉の全体系を現象学が自己のうちに含むということ、つまり諸学問の全領域における現象学の中心的意義が、明らかに示されることになる。まさにそれとともに、現象学は、真の意味でそう呼ばれるべき〈第一哲学〉という使命を獲得するのであり、一切の他の諸学問に究極的基礎づけに基づく統一と究極的諸原理への関係を付与し絶対的に普遍的な唯一の学問つまり最古の語義での哲学の生き生きとした機関として一切の諸学問すべてを新たに形成するという使命を獲得するのである」<sup>7)</sup>。ここで、フッサールは、一切の他の諸学問を究極的に基礎づける絶対的正当化の機能と一切の他の諸学問に究極的諸原理への関係を付与し諸学問の全領域を普遍的に体系化する絶対的普遍化

の機能をもつ「第一哲学」として現象学を意義づけている。つまり、1922年のロンドン講演の学問論において、フッサールは、現象学が学問全体を絶対的に正当化し絶対的に普遍化する「第一哲学」としての使命を果たすべきことを明示し、現象学を学問全体の扇の要として位置づけるべきであることを説いているのである。

しかし、学問全体を現象学によって超越論的に基礎づけるということだけであれば、1919年夏学期講義「自然と精神」において、すでに唱えられていたはずである。そうだとすれば、1922年のロンドン講演の「新たな構想」の核心的内実は、一体何か。

1922年のロンドン講演の序文において、フッサールは、次のように述べている。「哲学の相關者は、一切の真に存在するものの全体性である。それとともに、普遍的で絶対的に正当化された学としての哲学の或る新たな理念が、そのさらなる発展全体を規定しながら登場する。哲学の可能性の諸条件の原理的研究に基づいて哲学は初めて可能であるということが、すでにここで示唆される。ここには、二段階での哲学の必然的な基礎づけおよび区分という理念が存するのであり、二段階とは、第一哲学としてのそれ自体で正当化されるラディカルな方法論と、第一哲学の正当化する一切の基礎づけにおいて第一哲学に遡行的に関係づけられる第二哲学である」<sup>(8)</sup>。ここで、フッサールは、「普遍的で絶対的に正当化された学としての哲学の或る新たな理念」および「哲学の可能性の諸条件の原理的研究」に言及しているが、現象学こそが普遍的で絶対的に正当化された学としての哲学であり、現象学こそが哲学の可能性の諸条件の原理的研究を行いうるし行わなければならないと言いたいのであろう。また、フッサールは、「二段階での哲学の必然的な基礎づけおよび区分という理念」に言及し、それ自体で正当化されるラディカルな方法論としての第一哲学が第一哲学に遡行的に関係づけられる第二哲学を正当化し基礎づけると説いているが、それ自体で正当化されるラディカルな方法論をもつ現象学こそが第一哲学として第二哲学としての現象学を正当化し基礎づけると言いたいのであろう。そうだとすれば、現象学は、哲学としての自己の可能性の諸条件の原理的研究を行わなければならないことになるし、自己を正当化し基礎づけなければならないことになる。現象学が現象学の可能性の諸条件の原理的研究を行い、現象学が現象学を正当化し基礎づけるとは、一体どういうことだろうか。

その問題を解決する手がかりとして、フッサールは、第一ロンドン講演において次のように述べている。「私は、直観されたものから純粹に私の概念を手に入れなければならないのであり、純粹記述のみが始まりに許される。これを以て、私は、始まりの教導

的原理をもつ。次に、その際に存するのは、十全な直観の下に知覚を理解することであり、それゆえ、私に対して十全な自己所与性として与えられうるような、あるいは等価の事だが、必当的存在必然性 [apodiktische Seinsnotwendigkeit] においてそして必当的不可疑性 [apodiktische Zweifellosigkeit] において与えられうるような個体的存在の領域を求めることである。さしあたり、我々は、こうしたより一層特殊な主導思想を試みよう。我々がどのようにして必当的に不可疑の存在領域を入手することになるのかという今掲げられた問題を以て、我々は、再び、その欠陥として一切の原理的な予備の問題を論じないままにしておいたデカルトの思考過程のうちにある」<sup>9)</sup>。ここで、フッサールは、現象学のもつそれ自体で正当化されるラディカルな方法論としての現象学的還元という哲学的方法の構成要素である現象学的直観と純粹記述を始まりの教導的原理として提示し、まず知覚に対する現象学的反省的分析を行うべきであることを説いている。なぜなら、知覚の現象学的反省的分析こそが、必当的存在必然性においてそして必当的不可疑性において与えられうるような個体的存在の領域の入手を可能にし、引いては、想起・予期・空想等に対する現象学的反省的分析が、個体的存在の領域を中核とする経験的世界の存在の領域の入手を可能にし、遂には、超越論的現象学が、学問全体を究極的に正当化し基礎づける必当的基底としての超越論的現象学的経験の領域の入手を可能にするからである。フッサールから見れば、デカルトは、西洋哲学史上初めてエゴ・コギトという意識の領域を主題化しのちの意識分析の哲学としての現象学の誕生への方向性を作り出した点では評価されうるが、哲学の使命である原理的研究をそれ以上推進しなかった点では批判されるべきであるというわけである。そうだとすれば、現象学が哲学の使命としての原理的研究を推進することにより、ラディカルな方法論としての第一哲学たる現象学が、第二哲学としての現象学を必当的に基礎づけることになる。それゆえ、哲学の使命である原理的研究の特性は、第二哲学としての現象学を基礎づける第一哲学としての現象学の「必当性 [Apodiktizität]」である。そして、哲学としての現象学の使命である原理的研究は、「現象学の自己批判」だと言える。

実際に、フッサールは、第一ロンドン講演において次のように述べている。「我々が現象学的還元と呼ぶようなあの固有の遮断によって私が方法的に保証するような必当的に明証的な反省的经验が存在する。そのような反省的经验において、私は、絶対的に不可疑の経験の地盤を、それ自体絶対的に閉じた存在領域を獲得するのであり、しか

も純粹な知覚の対象としてである」<sup>(10)</sup>。ここで、フッサールは、現象学的還元によって獲得される絶對的に不可疑の経験の地盤が方法論的に見て必當然的に明証的なものとして保証されるものであることを、「現象学の自己批判」として語っている。1922年のロンドン講演の新たな構想の核心的内実は、まさに「必當然性」を指標とする「現象学の自己批判」なのである。

また、フッサールは、第二ロンドン講演において次のように述べている。「私は、哲学的省察者として、事實学的研究の可能性に関して依然として問題であるようなエゴ・コギトの個別的必當然的明証と並んで、自我およびコギト一般の一切の理念的可能性に関する具体的本質直観および具体的に汲み取られる直接的本質法則の無限の領域を獲得する。それとともに、要求されたように、實際に絶對的正当化に基づく第一の学が切り開かれるのであり、十全で必當然的な明証に基づく学として切り開かれるのであり、第一（哲学）が切り開かれるのである。事實的であるような私のエゴやコギタチオネスについての事實学ではなく、我々は、第一の学として形相的学を獲得する。より一層厳密に言えば、我々は、超越論的主觀性一般の、その可能的意識の、その可能的志向的能作の直接的に十全に観取可能で客觀的に確定可能な本質特異性の体系的形相的記述の無限の領野をさしあたり獲得する。……我々の究極的成果は、一切の哲学の第一哲学としての形相的現象学が可能で必然的な目標であるということであり、形相的現象学は十全な明証をもつ主導的原理という最初の絶對的に正当化された学であるということである。次の講演（第三ロンドン講演）で、形相的現象学は、普遍的なアブリオリな哲学としてそして一切のアブリオリな学の母として明らかになるだろう。我々は、さしあたり、形相的現象学が唯一の有意義な認識論であるということ、さらにはそれどころか完全に展開された論理学および学問論が形相的現象学と一致するということを示すだろう」<sup>(11)</sup>。ここで、フッサールは、超越論的主觀性の領野を獲得する形相的現象学つまり超越論的現象学が第一哲学として学問論の基底となることを明示している。したがって、フッサールの思想展開における 1922 年のロンドン講演の意義は、「必當然性」を指標とする「現象学の自己批判」による学問論の絶對的正当化および絶對的普遍化に存するものと言える。

さて、本論は、次節において、1922/23 年の哲学入門講義について吟味検討しなければならない。

### (3) 1922/23 年の哲学入門講義の「必当然的還元」

ゴーセンズによれば、1922/23 年の哲学入門講義は、哲学の理念のうちに共に含まれる学的哲学の普遍性という側面をあまり仕上げたがらず、むしろ、フッサールにとってもはや哲学的伝統の大部分にとってもあらゆる体系的構想の始まりとされるような哲学的な究極的基礎づけという中心的課題に取り組み解決することがもくろまれる。視野に入れられた行動計画の遂行は、すでに第二ロンドン講演において示唆として見いだされうるのであり、このさしあたり継承された講演テキストのほぼ中間の所で設定し、それから不可避免的にその根源的次元をこじあける。それゆえ、1922/23 年の哲学入門講義とともに先鋭化されて定式化されるのは、1922 年のロンドン講演の仕上げではなく、第二ロンドン講演の仕上げのみなのである<sup>(12)</sup>。

ゴーセンズの言うとおりに、1922/23 年の哲学入門講義は、1922 年のロンドン講演の「現象学の自己批判」ないし「学問論的必当然的基礎づけ」の主題化を先鋭化させたものと言えよう。

フッサールは、1922/23 年の哲学入門講義において次のように述べている。「我々は、現象学的還元あるいはより一層適切には超越論的還元概念における或る根本的な区別を以て始める。現象学的還元は、そもそも、現象学に対して真にその基盤を与えるような還元のみを適切に意味しなければならないだろう。そのような還元を、我々は、そもそも初めて探究する。超越論的還元という言い回しは、さしあたりあまり拘束力のあるものではない。一切の分離されるべき還元が本来の現象学的還元にとって前段階であるかぎりでのみ、我々は、そのような還元を今やもはやそう呼ぼう。実際に、我々は、還元概念を増やさなければならないだろう。しかし、さしあたり、我々は、①超越論的還元そのものを超越論的主観性一般への還元として区別する。②必当然的還元とは、つまり超越論的主観性への還元であるが、しかし確定された必然性への制限の下での還元である」<sup>(13)</sup>。ここで、フッサールは、本来の現象学にとって前段階であるような一切の分離されるべき還元を本来の現象学的還元から区別している。本来の現象学にとって前段階であるような一切の分離されるべき還元の一例が、①の超越論的主観性一般への還元としての「単なる超越論的還元」である。それに対して、②の必然性への制限の下での超越論的主観性への還元は、「必当然的還元」であり、「本来の現象学的還元」である。つまり、「現象学の自己批判」ないし「学問論的必当然的基礎づけ」に関して



無自覚的に「単なる超越論的還元」を遂行する現象学は、第二哲学としての現象学であるのに対して、「現象学の自己批判」ないし「学問論的必当然的基礎づけ」に関して自覚的に「必当然的還元」を遂行する現象学は、第一哲学としての現象学であり、現象学に対して真の基盤を与えるような「本来の現象学的還元」を遂行する「本来の現象学」なのである。したがって、1922/23年の哲学入門講義において、フッサールは、「現象学の自己批判」ないし「学問論的必当然的基礎づけ」を含意するような超越論的現象学的還元を「必当然的還元」と呼んで、重点的に主題化しているものと言える。

ゴーセンズによれば、一切の知および研究の究極的基礎づけという仕方での絶対的に正当化された認識への要求は、素朴な学問に欠落しているだけではなく、まだ現象学的哲学ではない現象学にも欠落しているような主導的で「本来的に哲学的な要求」<sup>(14)</sup>である。究極的基礎づけの断念は、フッサールにとって、哲学の断念とまさに同じ意味をもつ。それに対して、単なる現象学は、こうした要求なしでも問題なく可能である。しかし、そのような現象学は、フッサールによれば、「一切の哲学的関心に先立ち、一切の哲学そのものに先立つ」<sup>(15)</sup>。哲学入門は、現象学入門とは全く別の無謀な企てである<sup>(16)</sup>。

「哲学入門は、現象学入門とは全く別の無謀な企てである。」というゴーセンズの指摘は、きわめて啓発的である。フッサールは、「自己の学問論的転回点」としての1919年夏学期講義「自然と精神」の学問論を境に、素朴な「現象学入門の叙述の次元」から高次の「哲学入門の叙述の次元」へ転換したものと言える。それは、「現象学の理念」の叙述に明け暮れた1910年代までのフッサールの境位から「哲学の理念」の叙述に立ち向かうフッサールの新たな境位への転換である。

ゴーセンズによれば、「純粹現象学への一般的入門」という副題をもつ『イデーンⅠ』（1913年）は、哲学的体系への入門書としては使えなかった。したがって、「哲学の体系」の原理的始まりの叙述という新たな意図によって、フッサールがまだ『イデーン』（第1巻の『イデーンⅠ』は1913年に公刊された著作であり、第2巻の『イデーンⅡ』は1912年から1918年へかけて執筆された草稿であり、第3巻の『イデーンⅢ』は1912年に執筆された草稿である。）を以て追究していた構想全体の変更へ不可避免的に至る。『イデーン』は、哲学の高みへ初めて至ることになるが、しかも、第1巻を以てすでに導入されてはいるがそこではまだ素朴なままである純粹現象学から出発してそうなるのである。それに対して、今や、「哲学の理念」の展開が、考察の始まりで同等視されるのであり、「哲学の理念」の展開は、『イデーン』においてはそのもともとの計画ど

おりに第3巻に委ねられることになる。しかし、現象学的経験の領野もまた、『イデーン I』の「基礎的考察」において新たに導入された現象学的還元の方法を介して厳密に学問的に獲得されるにせよ、その存立の妥当性に関しては、『イデーン I』ではまだ基礎づけられていないままであろう。けれども、最初に哲学の課題となるようなラディカルな認識批判においては、もはやそれほど長くは受け入れられない。1922/23 年の哲学入門講義の哲学入門という新たな構想においては、もはや初めに究極的基礎づけの問題が展開されるのであり、哲学的始まりという問題設定と体系的に絡み合わされるばかりでなく、究極的基礎づけもまた、もはやいかなる素朴な定立も受け取らないような究極的認識批判によって実際に遂行されることになる<sup>(17)</sup>。

ゴーセンズの言うように、フッサールの中期の主著『イデーン』までは、現象学的還元の方法によって現象学的経験の領野を獲得するところまでであり、1922/23 年の哲学入門講義において初めて、現象学的還元の方法によって獲得される現象学的経験の領野の存立の妥当性が問われる。したがって、フッサールは、『イデーン』の 1910 年代までは「現象学の理念」に基づいて「現象学入門」を叙述することで精一杯であったが、1922/23 年の哲学入門講義において「哲学の理念」に基づいて「哲学入門」を叙述することにより「必然的還元」を主題化することになったものと言える。

#### (4) 1923/24 年の第一哲学講義の「客観的認識の批判」

1922 年のロンドン講演も 1922/23 年の哲学入門講義も、学問論の基底としての第一哲学を主題化しているわけだが、第一哲学が公式の題目とされたのは、1923/24 年の第一哲学講義である。それでは、1923/24 年の第一哲学講義は、1922 年のロンドン講演や 1922/23 年の哲学入門講義とどのような関係にあるのだろうか。

ゴーセンズによれば、1923/24 年の第一哲学講義のテキストにおける 1922 年のロンドン講演や 1922/23 年の哲学入門講義の意図からの或る逸れは、おそらく「世界内的経験の批判」についてのより一層幅広い詳論を以て初めて、しかし究極的には超越論的還元の問題設定についての第二部第三篇がそれを以て始まるような第 39 節を以て確実にすぐ分かる<sup>(18)</sup>。

ゴーセンズの指摘のとおり、1923/24 年の第一哲学講義は、第二部第二篇「世界内的経験の批判 超越論的還元への第一の道」を以て、1922 年のロンドン講演や 1922/23

年の哲学入門講義のテキストの流れを汲む第二部第一篇「哲学の必当然的始まりについての予備的省察」の「必当然的基礎づけ」の路線から逸れる。そして、その逸れは、第二部第三篇「現象学的還元現象学について 超越論的還元への第二の道の開示」を以て決定的となる。

フッサールは、第二部第二篇「世界内的経験の批判 超越論的還元への第一の道」の中盤よりやや後の箇所ですべてのように述べている。「世界の現存は、徹底して不十全であり本質から見ても現存から見ても原理的に十全なものへ変えられないような経験において根源的に与えられるのであり、それゆえ世界の非存在は、絶えず開かれたままである。世界の現存在および世界が包含する一切のものもまた、普遍的転倒のうちに含まれなければならない」<sup>(19)</sup>。ここで、フッサールは、超越論的現象学的還元によって不十全な世界内的経験が十全な超越論的経験へ普遍的に転倒させられることを説いている。ここで説かれている「超越論的還元への第一の道」とは、「世界内的経験の批判を介して超越論的還元へ至る道」であり、それは、もはや、1922 年のロンドン講演や 1922/23 年の哲学入門講義の「学問の必当然的基礎づけを介して超越論的還元へ至る道」ではない。

また、フッサールは、第二部第三篇「現象学的還元現象学について 超越論的還元への第二の道の開示」の最後の第 46 節「現象学的方法の新たな形成と深化：超越論的還元へのデカルト的道と心理学者の道」<sup>(20)</sup>において、1922 年のロンドン講演や 1922/23 年の哲学入門講義の「学問の必当然的基礎づけを介して超越論的還元へ至る道」を「超越論的還元へのデカルト的道」と呼び、それと対比される新たな道を「超越論的還元への心理学者の道」と呼んでいるが、後者の道が、「超越論的還元への第二の道」に他ならない。

したがって、1923/24 年の第一哲学講義は、1922 年のロンドン講演や 1922/23 年の哲学入門講義の「学問の必当然的基礎づけ」の路線を部分的に継承しつつも徹底化することではなく、途中で「世界内的経験の批判を介して超越論的還元へ至る道」や「超越論的還元への心理学者の道」へ主題化の重点を移すことになる。そして、ここで明瞭となった三つの道は、最晩年の集大成の書である『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（1936 年）へ向けて「超越論的現象学へ至る三つの道」を形作っていくことになる。つまり、その三つの道とは、「学問の必当然的基礎づけ」の路線上の「デカルト的道」、「世界内的経験の批判」の路線上の「存在論を介しての道」、「心理学者の道」の路線上

の「心理学を介しての道」である。

それでは、1923/24 年の第一哲学講義のテキストにおける 1922 年のロンドン講演や 1922/23 年の哲学入門講義の意図からの或る逸れをどのように解釈したらよいのだろうか。

ゴーセンズによれば、フッサールは、1922/23 年の哲学入門講義と 1923/24 年の第一哲学講義が共同で第一哲学を成すことになるという新たな構想を視野に入れていた。だから、1924 年 12 月に、フッサールは、インガルデンに、「相互に補い合う基本的講義」<sup>(21)</sup>について語っている。その際に、フッサールはそこで一層詳しく説明しているのだが、1923/24 年の第一哲学講義は「現象学的還元の意味および射程のきわめてラディカルな基礎づけ」を提供するのに対して、1922/23 年の哲学入門講義はもっとその背後へ遡って「あらゆる客観的認識批判の究極的基礎としての超越論的現象学的認識の批判の構想」<sup>(22)</sup>を提供するものと言えよう。客観的認識の批判を、フッサールは、1923/24 年の第一哲学講義の「主要テーマ」<sup>(23)</sup>と呼んでいた。こうした批判の批判は、最初の批判によって到達されその最初の批判の成果であるような主観的基礎の批判よりも根本的である。こうした究極の批判が、初めて、哲学的究極的基礎づけという第一哲学にとって断念不可能な課題を果たす。しかし、それとともに、1922/23 年の哲学入門講義と 1923/24 年の第一哲学講義の相互の補完的關係は、相互に区別されて規定されうる。すなわち、1923/24 年の第一哲学講義は、1922/23 年の哲学入門講義を補完する。それというのも、1923/24 年の第一哲学講義は、そこでもすでに核心において叙述される客観的経験の批判を呈示し、とりわけ、1922/23 年の哲学入門講義においてデカルト的道でのみ遂行される超越論的還元の或る詳細な理論を可能な他の諸々の道とともに展開するからである。それゆえ、1923/24 年の第一哲学講義は、とりわけ、以前は手短にのみ持ち出されそして抑制されたテーマを詳細にそして拡張して取り扱う。それに対して、1922/23 年の哲学入門講義は、のちの講義で完全に欠落しているものを補完し、フッサールの新たな構想全体において痛恨の穴を塞ぐ<sup>(24)</sup>。

1922/23 年の哲学入門講義と 1923/24 年の第一哲学講義が相互補完的であるというゴーセンズの解釈は、説得力のある的確な解釈だと言える。1923/24 年の第一哲学講義の「主要テーマ」が「客観的認識の批判」だとすれば、1923/24 年の第一哲学講義において「世界内的経験の批判を介しての道」や「心理学者の道」が取られたことも理解されうる。つまり、世界内的経験にせよ心理学者の立場にせよ、それらは、「客観的経験」

に基づく世界の現存を前提とした「客観的経験」の次元で成立するものであり、「客観的経験」に基づく「客観的認識」に関連するものである。したがって、客観的経験の次元からの超越論的還元によって開示される超越論的経験は、主観 - 客観の相関の具体的内実を包含する「客観的経験」の現象学の主題的領野ということになる。それに対して、1922/23 年の哲学入門講義における「学問の必当然的基礎づけの道」は、デカルト的方法的懐疑を現象学的に徹底化させて超越論的還元を遂行するものであり、エゴ・コギトという「主観的経験」に基づく「主観的認識」に関連するものである。それゆえ、1922/23 年の哲学入門講義の「主要テーマ」は、「主観的認識の批判」であり、「必当然的還元」としての超越論的還元は、「主観的経験」の現象学の主題ということになる。したがって、まず、1922/23 年の哲学入門講義において「主観的認識の批判」が遂行され、次に、1923/24 年の第一哲学講義において「客観的認識の批判」が遂行されたと解釈すれば、両講義の「補完的關係」が納得のいくものとなる。

## 結語

本論は、まず、1922 年のロンドン講演とそれを拡張的に仕上げようとした 1922/23 年の哲学入門講義の新たな構想に基づく学問論は、「哲学的体系の普遍性」という量的契機と「哲学的体系の絶対的正当化」という質的契機を軸にして展開する、ということ洞察した（第 1 節）。次に、フッサールの思想展開における 1922 年のロンドン講演の意義は、「必当然性」を指標とする「現象学の自己批判」による学問論の絶対的正当化および絶対的普遍化に存する、ということをも明らかにした（第 2 節）。そして、フッサールは、『イデーン』の 1910 年代までは「現象学の理念」に基づいて「現象学入門」を叙述することで精一杯であったが、1922/23 年の哲学入門講義において「哲学の理念」に基づいて「哲学入門」を叙述することにより「必当然的還元」を主題化することになった、ということ洞察した（第 3 節）。さらに、1922/23 年の哲学入門講義において「主観的認識の批判」が遂行され、1923/24 年の第一哲学講義において「客観的認識の批判」が遂行されたと解釈すれば、両講義の「補完的關係」が納得のいくものとなる、ということをも明らかにした（第 4 節）。

---

注

- (1) 拙論「フッサールの学問論的転回点」(『筑波哲学』第20号、2012年3月)の35頁を参照。
- (2) Vgl. Edmund Husserl, *Husserliana* Bd. XXXV (以下、Hua. XXXV.と略), *Einleitung in die Philosophie Vorlesungen 1922/23*, hrg.v.Berndt Goossens, Kluwer Academic Publishers, 2002, S.XVIIIff. .
- (3) Vgl. *ibid.*, S.XIXf..
- (4) Brief an Bell vom 14.5.1922, Edmund Husserl, *Husserliana Dokumente, Briefwechsel*, Bd.III, *Die Göttinger Schule* (以下、Briefwechsel, Bd.III.と略) ,S.39f..
- (5) Vgl. Hua. XXXV, S.XXI ff..
- (6) Vgl. *ibid.*, S.XXIV.
- (7) *Ibid.*, S.311f..
- (8) *Ibid.*, S.314.
- (9) *Ibid.*, S.318.
- (10) *Ibid.*, S.73.
- (11) *Ibid.*, S.328f..
- (12) Vgl. *ibid.*, S.XXVI.
- (13) *Ibid.*, S.98.
- (14) Edmund Husserl, *Husserliana* Bd.VIII (以下、Hua.VIIIと略) , *Erste Philosophie* (1923/24) .  
Zweiter Teil. hrg. v. Rudolf Boehm, Martinus Nijhoff, 1959, S.172.
- (15) *Ibid.*, S.172.
- (16) Vgl. Hua. XXXV.S.XXVIf..
- (17) Vgl. *ibid.*, S.XXVIIIf..
- (18) Vgl. *ibid.*, S.XLV.
- (19) Hua.VIII,S.68.
- (20) *Ibid.*, S.126.
- (21) Briefwechsel, Bd.III,S.223.
- (22) *Ibid.*, S.223.
- (23) Hua.VIII, S.369 Anm. (1) .
- (24) Vgl. Hua. XXXV.S.XLVIIIff..

(ほり・えいぞう 大分工業高等専門学校一般科文系教授)